

AIDS UPDATE

No.81 2008. 3. 17

広島大学病院
エイズ医療対策室
内線5581(輸血部長室)
Internet:www.aids-chushi.or.jp

『薬物依存症とHIV感染症』講演会のご報告

3月3日、広島大学教職員向けエイズ講演会として、筑波大学の森田展彰先生より「薬物依存とHIV感染症 - 予防的な働きかけを中心に - 」と題した講演がありました。

当院のHIV医療の中でも、薬物依存の問題が絡むケースがあり、関わり方のヒントを得たいという思いで講演を聞きました。1時間の講演と30分の質疑応答という短い時間でしたが、大変密度の濃い内容で、森田先生が現場で熱心に活動されていることが伝わってくる講演でした。以下、講演の内容の一部をご紹介します。



最近の日本の現状として、薬物入手が容易になっており、これまで取締りの対象になっていなかった違法ドラッグがセックスドラッグとして使用されることが広がっているということでした。また、諸外国と比べると日本でのHIV感染者に占める薬物使用者の割合はまだ少ないものの、薬物使用者のHCV感染率が40%であることから、もしHIVが入り込んだ場合には薬物使用者の間に急速にHIVが広がって行く危険性が高いと先生は指摘されて

いました。

しかし、薬物問題への日本の対応が取り締まりの強化に偏っており、薬物使用者が依存症から回復するための取り組みは、ダルク（薬物依存症者のリハビリセンター）やNA（断薬のための匿名性プログラム）などの民間の自助活動に頼りきった現状ということでした。また、薬物依存症者は不安定な養育体験やトラウマの問題があることが多く、薬物依存の問題と人間関係の問題が密接に絡み合っているということも話されました。



最後にHIV予防に向けた薬物依存症者への心理的援助のポイントとして、森田先生は、以下の5つを挙げておられました。

- 回復への動機付け面接
- 対人関係のスキル訓練
- 再発パターンを認識し再発を防ぐ
- 長く援助関係を維持し安全基地体験を増やす
- 各機関の連携

どれも大変納得するもので、心にとどめて今後の臨床に活かしていきたいと思いました。

（カウンセラー 喜花）

【退職のご挨拶】

エイズ医療対策室 佐藤

県外への転居に伴い、今年度で広島大学病院を離れることになりました。大学病院で業務をこなしていくにあたっては、本当に多くの方々にお世話になりました。当対策室主催の研修会・講演会にご協力下さった医療スタッフの方々、それを支えて下さった院内各部署の皆さま、2年間本当にありがとうございました。

最後になりましたが、皆さまのご健康と益々の発展をお祈りしています。



H19年度エイズ拠点病院医療従事者海外研修を終えて

昨年の11月、平成19年度エイズ拠点病院医療従事者海外研修として、サンフランシスコ研修に参加して参りましたのでご報告致します。

2週間の研修プログラムでは、サンフランシスコでのHIV治療や医療体制、また、一般的なアメリカでの医療体制、緩和医療や医療者教育についても学ぶことが出来ました。日本と大きく異なる点としては、自分の保険によってかかる病院も違ってくるといふ保険制度にあると思いました。



また、チーム医療がしっかりと構築されており、各分野の専門性を生かして、患者を中心とした医療が行えていることを実感しました。その中でも特に、ソーシャルワーカー（SW）の役割の重要性が印象的でした。日本と違って、ライセンス更新制で、より専門性を高めていることもあり、患者の生活面におけるサポートが充実していました。日本でも病床数当たりのSWが増えていくことで、他の病院、開業医、介護施設などの連携がより図れるものになってくると思いました。



UCSF（カリフォルニア大学サンフランシスコ校）関連施設では、職員（医師、薬剤師、MSW）から各々の専門分野についてのレクチャーを受け、様々な観点から改めてHIV感染症をみる事ができました。日和見感染症の予防や抗HIV薬の登場により、HIV/AIDSは慢性疾患の一つとして位置づけられていることがよく理解できました。以前存在していたHIV/AIDS専用の病棟も今ではもうほとんど閉鎖されてしまっている状況にあり、ここ数年の間での変化もうかがえました。

またNGO見学では、より患者の生活に密接なところでのサポートが行われていることを理解しました。組織は、市や行政からの援助だけでなく寄付金などでも成り立っており、医療者からの支援とはまた違ったケアを受けることができ、その重要性を実感しました。



今回の研修で学びたかったことの一つにドラッグの問題があります。一過性の有機溶媒系ものから、精神病にまで至ってしまう危険性のあるものまで種類も様々です。サンフランシスコの“Needle Exchange Program”（注射薬物使用者への注射針交換プログラム）には驚きました。そして、その考えに至った経緯を聞いて納得しました。日本では同じようなことは出来ないと思いましたが、日本にあったHarm reductionに沿った発想も生まれてくるのではないかと思います。日本でも今後はドラッグとHIVが関連してくる症例も増えてくるものと思います。薬物相互作用を引き起こす可能性もあるのでドラッグの使用などについても注意していく必要もあると思いました。

研修を通じて印象に残った言葉は、“Harm reduction”、“Non-judgmental”、“Behavior change”、“Diversity”でした。患者に接する態度や患者を理解することは、HIVだけに限らず、最も大切なことだと改めて感じました。日本にはやや欠けている多様性についても今後は重要になってくると感じています。

（薬剤師 藤田）

<ご意見募集>

ご意見やご希望がありましたら、エイズ医療対策室(5351/5581)までお寄せください。

[TAKATA]